

2024

令和6年7月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻371号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

ともあそび



公益財団法人
さわやか福祉財団

皆さま、どうぞご参加ください！



いきがい・助け合い オンラインフェスタ 2024

開催の
お知らせ

好評いただいた 「いきがい・助け合いオンラインフェスタ」、 今年も秋に開催します。

生活支援コーディネーターや協議体、自治体の皆さんをはじめ、各地で住民主体の地域づくりに取り組んでいる方々に全国からご参加いただいています。基本の考え方や事例、課題への対応など、日頃の取り組みの参考に、ぜひ学び合いの機会としてご活用ください。

開催時期：2024年**10月15日(火)～10月24日(木)**

開催方法：完全オンライン配信方式（アーカイブ配信あり）

プログラム：オープニングフォーラム、特別トーク
個別テーマによる「学ぼう編」「語ろう編」他

申込受付：2024年**8月中旬**（予定）

参加費：1000円（税込） 後日ダイジェスト版を希望者に郵送
参加費と同額を当財団の「地域助け合い基金」に拠出して、
地域活動を応援します。

主な個別テーマ

- 生活支援コーディネーター・協議体の取り組み方
- 居場所と生活支援（有償ボランティア）の広げ方
- 近隣助け合いの広げ方
- 子どもの育みと地域の関わり方
- 認知症の方と地域の関わり方
- シニアの地域参加の働きかけ方
- つながりづくり

* プログラムは現段階での予定です。

プログラム、お申し込み方法の詳細は、
決定次第、当財団のホームページや本誌等でお知らせします。ぜひご参加ください。

とある

2024年7月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

ジェンダーと地域活動

清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

つながり、ささえあい

みんなが参加して幸せに暮らす

八木山地区社会福祉協議会（岐阜県各務原市）

11 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

子どもも大人ものびのび楽しむ秘密基地

手賀沼まんだら／コミュニティプレイス「ごちゃにわ」（千葉県我孫子市）

22 連載 共生社会 ― 認知症との新しい向き合い方 ③

「認知症」 および

「認知症の人」について思うこと ― その1ー

社会医療法人財団石心会理事長・川崎幸クリニック院長 杉山 孝博

24 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から ②③

世帯単位から個人単位へ

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

26 連載 人生100年 地域とつながる施設とは ③

特養ホームにおける虐待の実態

公益財団法人Uビジョン研究所理事長 本間 郁子

新しいふれあい社会づくりに向けて

18 「地域助け合い基金」

助成先のご紹介／状況のご報告

30 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

32 活動日記（抄）

㊟財団ツール紹介

㊟みんなの広場 / 投稿募集

㊟さわやかパートナーのご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと・石山 麗子

ジェンダーと地域活動

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

今や日本でもジェンダーという言葉は当たり前前に報じられるようになった。簡単にいえば、肉体的な男女といった性差とは別に、社会や文化の中で生まれてきた性差（性別）に対する考え方を指す言葉だ。いわゆる「男らしさ」「女らしさ」。こうした固定概念や役割を無意識に求め、あるいは強要する社会や組織・集団は、これからの時代ももっとも変えていくというもの。全世界で取り組む重要な課題の一つとして、ご存知のとおり、SDGsの目標にも「ジェンダー平等の実現」が掲げられている。

先頃発表された「ジェンダーギャップ報告書」（2024年版・世界経済フォーラム）は、世界146か国の男女格差の状況をまとめている。今回、日本は118位。前年の125位から改善、と報じたニュースもあるが、G7各国の中では最下位で本質的な環境改善にはまったく至っていない。教育・健康・政治・経済の4つ評価分野があるが、政治は向上したといっても元々が非常に低く今回も10%台（完全平等は100%）。経済は世界全体で改善傾向とされている一方、日本は前年より悪化している。翻って、日本の地域活動の現場はどうだろうか。活動分野にもよるが、NPO活動では総じて多くの女性がいきいき活躍している。むしろ男

性のほうが地域デビューが課題といわれて、参加が進んでいない側面もある。一方、自治会など昔からの伝統がある地縁の活動は、参加自体は女性も多くても、意思決定や重要な役割は男性主体になっているところがまだ圧倒的に多いといわれる。婦人会として活発に進められている取り組みもあるが、中にはそれが女性的役割として区別されていたりする。地域によってはジェンダー平等という考え方自体を口にするのがはばかれることもあるという。

しかし、人の暮らしに直結している地域の活動こそ、皆でより理解し合い、具体的に考えていくことが必要ではないだろうか。ジェンダー平等の考えは伝統的な特色や地域の仕組みを崩すとして、男女の対立構図の話に矮小化されていることがあり驚くが、これは大きな誤解だ。男性だって「男性らしさ」を強く求められて生きづらさを大いに抱えている人がいる。婦人会も最近では廃止して、性差を超えて皆で考えようという組織に再編する動きも出てきている。

目指すところは、強制され固定化された役割や差別からの脱却で、それは、外国人や障がい者、認知症の方などとの地域における関係でも変わらない。誰もが自分の意思と嗜好を大切に自由な生きられる共生の地域づくりの重要な道標と考えてみてはどうだろう。

具体的取り組みとして。たとえば、地域課題を皆で考える意見交換の場で、男女を同数にする。難しいときは、男⇆女と、立場を変える。LGBTQや外国人の方、認知症の方、さらには子どもなど、まさに違う立場になって想像しながら意見を出し合うと空気が変わる。また、男性チームと女性チームに分かれて、交互に一つずつ決定したことを必ず採用する。結果としてやっぱり一緒に考えていこうよとなることが多く、いずれも自然な相互理解が進む。本誌をご愛読いただいている皆さん、ぜひそれぞれの地域でもさらにチャレンジしてみませんか？



つながり、ささえあい みんなが参加して 幸せに暮らす

八木山地区社会福祉協議会（岐阜県各務原市）

高齢化率が年々高まる我がまちを安心できる終の棲み家とするため、つながり、支え合う活動を住民の手でスタートしたのが2013年。それとほぼ同時に立ち上がり、このほど10周年を迎えた「ささえあいの家」を拠点に多彩な取り組みを展開しているのが、八木山地区社会福祉協議会です。本誌で特集した2016年から、さらに充実し広がりを見せる活動取材しました。

（取材・文／境 朗子）

リタイア組による
お助け隊、地域デビュー

「仕事が命」だった人にとって、リタイア

ア後には地域でどう暮らすかは大きな
テーマだろう。

「とりあえず近所に飲み友だちが欲しいなあ」。会社を退職するにあたり、

八木山地区社協の
居場所
「ささえあいの家」



そう考えた片石隆雄さん（80歳）は近隣の男性たちと誘い合って飲み会を開いた。やがて飲み友だちの輪はボランティア活動の輪に発展。元企業戦士たちの価値観を大きく変えることになった。

各務原市東部に位置する八木山地区にこぢんまりと建つ平屋。庭では年季の入った芝刈機の修理に集中する2人組。室内をのぞくと、見事な手さばきで襖の張り替えを行う男性の姿があった。ここが彼らのボランティア活動の拠点であり、住民の居場所「ささえあいの家」。その運営母体が八木山地区社会福祉協議会である。

八木山地区は50年ほど前、高度経済成長を背景に里山を造成して誕生した一戸建て団地だ。各地から当時のニューファミリー層が一斉に移り住んで共に年を重ねた。子どもたちは巣立ち、7000人ほどだった人口も今や48

00人に減少。高齢化率は45%を超えて市内最高である。

元教員で同地区社協事務局の清水孝子さんは「景色も空気もよくて、当時



襖や障子の張り替えの達人・杉本博さん



芝刈機を修理する友岡幸一さん（左）と、平田俊一さん（右）

は皆喜んで暮らしていました。でも坂の多いまちなので、高齢になると買い物や通院に難儀し始めるのです」と振り返る。「今のうちに平らなまちに引っ越すことにした」「夫が車いす生活になったので遠方の子どものところに行く」。そんな声を聞くようになった。「これは大問題だ。この地を、終の棲み家々にしたい。そのためにはささえあうしかない」と清水さんは考えた。

折しも、輪番制の自治会や地区社協の役員がまわってきっていた。飲み仲間たちは「地域で何かしたいよね」との思いを抱き始め、清水さんと意気投合。地域の課題を共有しながらまちづくりを推し進めようと張り切った。事務所機能を持つ常設の拠点探しを始めたところ、飲み仲間の一人が「空き家を所有しているので安く貸すよ」と申し出た。市社協からは「夢を実現プロジェクト」事業の助成金が交付された。

「退職前に住宅建設の仕事をしていた人もいたし、古い家をワイワイ楽しみながらリフォームしました」と片石さん。2014年1月、「ささえあいの家」がオープンした。「地域のお助け隊になる」との目標を掲げ、依頼があった家へ出向いて営繕作業をすることになった。隊員たちと、材料費以外は無償で駐車場の屋根を取り替えに行ったら、絶品のカレーライスをご馳走になった。ピカピカの屋根を眺めてごきげんな依頼者と世間話で盛り上がる。仲間とも心が通う。「お金ではない、こんなに楽しい活動があったのか!」。こうして、活動の一つ「営繕の会」が最初に立ち上がった。

暮らしに寄り添う活動が 友人のような関係へ

困りごととは十人十色。それらにとことん向き合おうと、自治会のサポート

で「生活支援ボランティア活動」をスタートさせた。活動内容はごみ出し、一人歩きの見守り、縁台作り等々37項目。ボランティアを募ると、何と76名



堀部さん（左）と頼瀬さん（右）

頼瀬さん宅の掃除の支援

もの登録があった。八木山地区ではもとも趣味や健康、まちづくりなどさまざまな市民グループが活動しており、ボランティア活動の下地があったよう

だ。
やがて、「支援する人・される人の関係ではないよね。私たちも活動して得るものがたくさんある」との声が自然に上がり、みんなで議論し16年に「ささえあい活動」と名称を改めた。将来を見据え、誰でも活動に参加しやすいように、技術と労力を要するものについては有償にした。

「90歳の一人暮らしの女性が雨戸を開けようとしたら、肋骨が折れてしまった」と民生委員からささえあいの家に連絡が入った。「向こう三軒両隣といえども、毎日開け閉めを頼めるような関係は今の時代にはまずない」と感じていた清水さんが、ボランティア活動者の堀部喜久枝さん（73歳）に話すと、

堀部さんは「私がやります」。3か月間、毎朝毎夕女性宅へ通う中で「私が元気なら、ささえあいの家に行つて短歌を教えてあげられるのに」と女性がつぶやいたのを聞き逃さなかった。短歌の名手にささえあいの家で講座を持つてもらうのは体力面で難しかったが、堀部さん自身が女性宅で講義を受け、短歌の魅力にはまった。

堀部さんは4年ほど前から、**頼頼恒義さん**（90歳）に家事支援を依頼され、2人の活動者と交代で通っている。当初、頼頼さんは自宅で妻を介護するために介護保険サービスでヘルパーを利用していたが、制度上の制約があり不便に感じていたという。ところが堀部さんの支援は、暮らしにまることが寄り添うものだった。まさにささえあい活動の真骨頂だ。

「必要だと気づくと、いろんなことを懸命にやってくれる。感謝しています」

と頼頼さん。堀部さんは「実家に帰って手伝っているような気持ちです」と微笑む。家事が終わると、頼頼さんが用意してくれたお茶とお菓子の時間が待っている。まるで昔からの友人のようにつながりを感じる。「人生、生きておつてこそ。長生きしてくださいよ」。頼頼さんは堀部さんら年下の活動者にそう伝えている。

誰にでも出番がある

ささえあいの家は、八木山地区の、駆け込み寺でもある。玄関の鍵が開けられない。ベッドから落ちた高齢の夫を起こせない。トイレが壊れた――。

そんな連絡が入ると「さぞお困りでしょう」とすぐ動き出す。緊急事案は24時間対応だ。八木山地区社協会長の伊藤隆さん（81歳）は、自身のこれまで7年間のささえあい活動でつながった家庭が180軒。「手先を動かすのが



八木山地区社協会長の伊藤さん

6年前に始めた「ささえあい畑」。収穫した野菜を調理して住民に届け、喜ばれている



大好きで、困りごとの相談があれば飛んでいく」そうだ。トイレ詰まりの依頼でも即解決。器用に糞便を取り除き、ささえあい畑で肥料として有効活用までしたときは驚かれるやら、感心されるやら。依頼者たちの伊藤さんへの信頼度は増すばかりだという。

平田俊一さん（74歳）に風呂場の水回りトラブルを直してもらったのが早

水武さん（84歳）だ。「ささえあいの家には素晴らしい技術を持つ人が大勢おられる。家族が認知症になって手作り弁当も届けてくださる。私は将棋が好きですが、相手をしてくれるサロンもある。『望んでいる』と伝えるといつもしっかりと受け止め、そのたびごとに対応していただける。ありがたいことばかりです」と目に涙を浮かべながら話してくれた。サロンは誰が訪れてもOKで、自ら講師を申し出るのも大歓迎。だから早水さんは、機会を見て子どもを対象に将棋を教えたいと思っている。誰にでも人の役に立てる出番がまわってくるのがささえあいの家だ。

元企業戦士、 人の役に立つ喜びを得る

ここで元々バリバリの会社人間だった

ちがいかに意識改革を遂げるに至ったか、話を聞いてみよう。

愛知県で自動車関係のエンジニアとして働いていた伊澤道明さん（80歳）が子どもたちの故郷に選んだのは、自然環境が良く通勤圏でもある八木山地区だった。高度成長期の激務が続き、伊澤さんは倒れて集中治療室へ。幸い回復して会社を68歳まで勤め上げた。ISOの国際規格による企業診断の審査員資格を取得し、退職後にはそれを生かして第2の人生を送ろうと計画したものの、年齢の壁が立ちはだかった。「充電期間だと宣言して、朝寝・朝酒・朝湯の生活をしていたら、輪番で自治会の福祉委員の役がまわってきた。仕方ない、1年だけやるかと不遜な態度で関わっていました」と苦笑する。が、「地域の福祉を語り合おう」という地区社協のイベントで中学生によるボランティア活動の発表を聞き「いた

く感動した」。その足で「ささえあいの家」へ直行。目に飛び込んだのが「つながる・ささえあう」の理念を掲げる額縁だった。目からウロコが落ちてしまった伊澤さんは「仕方なく」から一気に百八十度転換。意欲的に活動に参画することになった。

掛布弘さん（84歳）は長年勤務していた郵便局を退職したが、「手に職もなく、家でぶらぶらしていて、お母ちゃんと喧嘩ばかりしていた」という。やがて病気を発症。手術を繰り返し、立ち続けているのも難しくなった。「ますます何もできなくなつた。このままではいかんなど思っていたら、家の前を清水さんが通りかかったのです」。思い切って「不器用だけど、何かやることはないだろうか」と聞いた。現在、掛布さんはささえあひ活動の草取り名人として活躍中だ。依頼者宅へは膝当てをしたズボンを履いて行き、体

がふらつく心配がないように、四つん這いになって丁寧丁寧に気持ちを込めて草を取る。依頼者は掛布さんから草取りのコツを教わり、いつの間にか一緒に汗を流すようになる。

「『本当にきれいになった。うれしい』という依頼者さんの一言のためにやっているようなもの。出してくださいるお茶と一緒にいただきますが、至福のひとときを味わっています」

坂道が多い八木山地区で暮らす高齢者の閉じこもりを防ぐために大いに役立っているのが「ささえあい移送」だ。自宅近くにバスが通らなければバス停まで移送する。軽ワゴン「ささえあい号」を利用するだけでなく、活動者がマイカーで送り迎えも行う。フレイル予防として人気の「おでかけノルディック」の参加者も、会場となる公園へ送迎。車いすユーザーになり、大好きなカラオケを諦めていた人が介護車両

での送迎を依頼し、生活に張り合いを取り戻した例もある。「閉じこもりがちな人を見つけて、移送サービスにつなげる大切さを感じている」と移送を担当する伊牟田守さん（70歳）は話す。

「まちの景色が変わって見えた」 お金で買えない心のつながり

活動者の登録は現在、160人に及ぶ。地域の枠を超えた連携も大切にし

ており、八木山地区以外の人も20人いる。38の活動項目から選んで登録するのだが、やりたいものが複数ある場合も多く、1人平均3・5項目に登録している。

利用者は毎年増え続け、23年の利用世帯数は243世帯、利用件数は926件になった。高齢化率の高さに対し、八木山地区の65歳

以上高齢者に占める現在の要介護認定者の割合は約13%。全国比で約6%低く、ささえあい活動が功を奏していると言えるそう。活動者の平均年齢は70代半ば。若い担い手が少ないのは課題だが、子どもの勉強などをみる「ささえあいスクール」に地元の大学生も協力するようになった。どの活動者にも共通するのは、「できる人ができるときにできることをする」を基本としな



会計担当の肥谷さん（左）と、事務局の清水さん（右）

がらも精一杯力を発揮していることだろう。介護が必要になっても、生涯活躍のロールモデルが身近に大勢いるほど心強いことはない。

「まちの景色が変わって見えた」。

地域への愛着が生まれ、共に生きる喜びを得たささえあい活動者の言葉である。

10周年を記念して実施した住民アンケートでは、活動への感謝や励ましの声が多く届くとともに今後の課題も見えてきた。

「広報紙『まちの福祉便り ささえあい』を毎月、地域の方々にきめ細かく配布していますが、この活動を知らない方や、知っていても内容を具体的に知らない方が一定数いることも分かりました。今後は広報活動をより活発にして、困っている方たちとさらにつながっていききたい」と会計担当の肥谷順子さん（82歳）。

当財団のさわやかインストラクター（岐阜県）で八木山地区社協とは長い付き合いのある河合肇さんも、「生活支援団体には男性が

参加しにくい場合がよくありますが、八木山地区社協さんは男性の得意なことが活動に生かされています。『ささえあいの家』も、本当に和気あいあいとして居心地がいい」と話す。

「公的サービスには制約がありますし、豊かな暮らしを送るために不可欠なの

は人と人とのささえあいです。それはお金では買えない心のつながりが実現させるものでしょう。私たちは地域包括ケアシステムを構築する一翼を担っていると感じています。こんなに幸せなことがあるでしょうか」と清水さんは語ってくれた。



八木山地区社協の皆さん

八木山地区社会福祉協議会

高齢化率の高い地域を終の棲み家になりたいとの思いから、地区社会福祉協議会が住民同士でのささえあい活動を開始。「ささえあいの家」を拠点に、困りごと相談の対応、外出時の移送、趣味や認知症茶話会等のサロン活動、野菜作り、フレイル予防等、多彩な活動を展開している。

●連絡先 〒509-0131

岐阜県各務原市つつじが丘4-6 ささえあいの家

電話・Fax：058-377-3400

メール sasaeai1419@mb.ccnw.ne.jp

ホームページ <https://sasaeai.stars.ne.jp/>

\\いきいき わくわく\\

子どもと一緒に 地域で輝こう



子どもも大人も のびのび楽しむ秘密基地

手賀沼まんだら／
コミュニティプレイス「ごちゃにわ」（千葉県我孫子市）

千葉県我孫子市の手賀沼のほとりにある竹藪をかき分けて進むと、コミュニティプレイス「ごちゃにわ」が現れます。母親5人がそれぞれスキルを持ち寄ってユニークな活動をたくさんつくり出し、子どもたちが個性あふれる大人に出会いながら、のびのびと遊べる場になりました。

（取材・文／森 祐子）

● 子ども vs 大人。

パエリア作りで勝負！

「それでは、各チームで始めてください！」

週末の昼前、日本パエリア協会の中村龍太さん（60歳）の掛け声で4チームが一斉に動き始めた。今日は、この地域に住む母親5人が集まって運営

するコミュニティプレイス「ごちゃにわ」で開催される「パエリアの会」の日。竹藪を切り開いてできた秘密基地のようなこの場所、朝10時から子ども20人、



パエリアの達人、中村さん



子どもも大人もみんなで薪割り

大人20人が集まって薪割りをしていた。

火おこしが完了し、今、パエリア作りがスタートしたのだ。各チームが焚火でパエリアを作り、見た目、うま味、香り、触感、おこげの5項目で競い合う。

面白いのが、大人チームと子どもチームに分かれている点だ。親子でも大人と子どもで別のチームに分かれ、子どもチームは本当に子どもだけで料理をしている。大人が進めて、子どもが手伝うのではない。小学生が包丁を持ち、火をおこし、レシピを見ながら料理する。大人vs子どもが対等に、真剣勝負する企画なのだ。

歩けるようになったばかりの子ども、「自分の仕事」とばかりに薪を運び、高校生は子どもチームのリーダーになっている。

●「コロナ禍でも遊ばせてあげたい」

「子どもたちがいい顔をしているでしょう？ このモットーは『集う・遊ぶ・働く』なんです」と子どもたちを微笑みながら眺めるのは、任意団体「手賀沼まんだら」代表の澤田直子さん。今回のパエリアの会をはじめ、「子どもたちとこんな企画をしたら楽しそう！」を次々と思いつくアイデア豊富な人だ。

2020年。コロナ禍で子どもたちが家に閉じ込められ、公園で遊ぶと近隣住民から市役所や学校に通報の電話が入る世の中になっていた。

「コロナ禍でも、自然に囲まれた場所で子どもたちを思いっきり遊ばせてあげたい——」。そこで澤田さんは、この竹藪に囲まれた遊休農地を借りて、誰でも来て遊べる秘密基地のような場をつくることを思い立った。「多様な価値観がごちゃまぜになりながら交わるコミュニティプレイス」との意味を込めて、「ごちゃにわ」と名付けた。

自然豊かなこの場所を活用したいと考えたとき、

一緒にアイデアを出し合ったのが、同じ幼稚園の保護者として知り合った渡辺玲衣さんだった。

「私も、子どもたちがのびのび遊べる場が欲しかった。ないのなら作っちゃえ!」と思ったんです」

渡辺さんは以前、環境教育関係の仕事をしていた生き物のスペシャリスト。「子どもたちが竹藪や沼で遊んでいて出合った生物に興味を持ったときに、専門家の渡辺さんが傍にいて知識を伝えてくれる意義は大きいです」と澤田さんは言う。

● 思いを共有する母親たちが 強みを生かして

澤田さんと渡辺さんが出したアイデアを実現していくのは、柏田あさみさんの役割。複数の会社で経理を担当しており、事務仕事のプロだ。パエリアの会では予算を考えて材料を買い揃えたり、関係各所に連絡するなど、準備段階で大活躍した大変な役割だが、「子どもをもっと外遊びさせたいと思って通うようになったんですが、気づいたら私の方が楽しくなっちゃって。子どもたちのた

めに運営するというより、まず私が全力で楽しんでいます」と明るく笑う。

また、こうしたコミュニティが仲間を増やしていくには、SNSでの発信、チラシ作成、ロゴやグッズのデザインなど広報も重要になる。ウェブサービスやデザインなどクリエイティブな部分を担うのが、澤田かほりさんと藤倉たまきさん。やはり子どもを自然の中で遊ばせたくて通っているうちに、澤田直子さんに「一緒にやらない?」と誘われた。「『ごちゃにわ』の良さを



ごちゃにわの運営陣。左から柏田さん、澤田直子さん、澤田かほりさん、藤倉さん、渡辺さん

伝えて、『素敵だな、まねしたいな』と思ってもらえるように、外に出すものはクオリティにこだわりたいと思っていたので、2人のデザイン力を貸してほしいと思いました」（澤田直子さん）

こうして、おのおのが強みを生かす母親5人のコアメンバーで「ごちゃにわ」は運営されている。「自分たちでできる範囲の身の丈に合った活動を目指しています。こういう自由に遊べる場が子どもの自宅の近くにたくさんあることが一番だと思うので、運営を手伝いたいと声をかけてくれた人には『自分たちでも作れるよ』とお話したり、どうやって行っているかお伝えしています」と柏田さん。現在は、1家族年間5000円の家族会費で遊び放題、イベント費用は別にもらって運営している。

● 本物を知っている大人と出会う

さて、パエリア作りは各チーム順調に進んでいる。子どもたちだって、ためらうことなく鶏肉を手づかみして上手に切り分けている。包丁が怖く

ないかたずねると、「全然平気。日頃からここにいるいろいろやっているから」と頼もしい言葉が。

パエリアに火が通るのを待つ間、小さな子を抱っこしてお世話している女の子に「妹さん？」とたずねると、「違うよ。妹じゃないけど面倒見てるの」と当然のように答えてくれた。ここでは皆、家族でなくても、大人でも子どもでも、ごちゃ

まぜになって過ごしているのだ。

「子どもチーム1」で中心となって火をおこし、小さな子どもたちに作り方を教えているのは、高



よその子ども当たり前に面倒を見る、まるで姉妹のよう



包丁の扱いも板についている子どもたち



中学生や高校生は、自然と小さい子たちの指導係に

とを聞けるのが楽しいんです」と話してくれた。

「ごちゃにわ」には、そのコンセプトに引き寄せられて個性豊かな大人たちが集まってくる。この日、竹筒で顔を真っ赤にして火おこしをしていた森健人さんは、元国立科学博物館の研究員で、現在は「一般社団法人路上博物館」の代表。3Dプリンターで作成したライオンの骨格標本を持って

校1年生の悠くん。

「僕が中学1年生のときに『ごちゃにわ』ができました。家でゲームするのも好きだけど、ここにはいろんな大人がいるのがいい。僕は映画が好きなんですけど、詳しい人が教えてくれたり、親以外の人に知らないこ



臨時の路上博物館がオープン。左は森さん

きて、パエリアに火が通るまでの間、子どもたちにライオンの歯の仕組みについて解説していた。子どもたちは次々と標本を手にとって興味津々の様子だった。

「鍋に上手に火を通すコツは、しっかり水平を作るこ

と。オリーブオイルを入れたとき、しっかり真ん中にたまるように調整するんだ」と大声を張り上げて指導する中村さんは、IT企業の社員のほか、フリースクール運営や農業などをかけ持ちし、自身を「複業家」と名乗るほどさまざまな仕事と肩書を持っている。パエリアに関しては、世界大会の日本予選を主催しているメンバーの一人だ。

「子どもたちがふれあう人は、本物を知ってい

る人を”と考えて、各分野のプロフェッショナルに積極的に声をかけています”と澤田直子さん。

子どもと参加したお母さんも、「以前は、子どもと自然を体験するために遠くまで行っていたんです。でも、ごちゃにわは近くにあるのにわざわざ遠くへ出かけるよりもっといろんな体験ができて、うれしいです」と笑顔だった。

● 子どもチーム1が優勝！

午後1時過ぎ、パエリアが完成した。みんなで各チームのパエリアを食べてまわり、「ここは香りがいいな」「このチームのおこげがおいしい」などと語り合っている。勝負は参加者全員の挙手で決定する。どのチームもおいしくて票が割れたが、香りが一番良かったという理由で、「子どもチーム1」が優勝した。子どもたちは手を取り合い、飛び上がって喜びを分かち合っていた。



子どもチーム1



子どもチーム2

「私は以前、近隣市の社会福祉協議会に勤務していた、市の境界で管轄が違うことにもどかしさを感じていました。そのため、『ごちゃにわ』への参加対象者は市内在住ではなく、命のつながりという意味で『手賀沼流域』と設定しています。雨が流れて手賀沼に集まってくるように、市外や遠

子どもの育ちを社会で応援しよう
地域まるごと みんなで笑顔に！



夢・ふれあい基金



公益財団法人

さわやか福祉財団



チームを超えて
結果を讃え合う子どもたち

方からでも気軽に
ごちやにわに集ま
ってほしいという
願いを込めてのこ
とです。せっかく
自然豊かな活動の
場を整備している

ので、林間学校や修学旅行のアクティビティを誘
致したり、地元の農家とコラボして収穫体験など
の食育企画もいろいろと立ち上げています。これ
からも『ごちやにわ』で子どもがのびのび遊び、
いろんな大人と出会える企画や環境を提供したい
と思っています」と澤田直子さんは笑顔で語った。

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、多世代食堂、配食手作り弁当、みんなの居場所等の活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。（*文中SCとあるのは生活支援コーディネーターの略）

埼玉県伊奈町

心も体も健やかに！
0歳～100歳が集える居場所

心地よく暮らす会MySa

助成金額 15万円

伊奈町多世代食堂「みんなのランタン食堂」は、子どもたちが安心して過ごせる場を地域の大人たちが食事を通して提供し、心も体も健やかに暮らせるように支援することを目的として2020年に発足しました。担当の第2層SCとはいつでも連携がとれる良好な関係を築き、発足当時

からたくさんの方の力添えを得ているとのことです。また、代表自ら協議体のメンバーとして地域の生活における困りごとを、他メンバーや第2層SCとミーティングで共有しています。

「ランタン食堂」が3年目を迎えたときに次のステップとして、0歳～100歳の居場所「みんなの

コミュニケーションハウス かどのいえ」をオープン。同世代はもちろん多世代でのつながりを地域で生み出し、育つ場所であることを大切にするために、SCと連携しながら「季



当たるかな？ みんなでゲーム

節の手しごとワークシヨップ」「ちいさなマーケッティイベント」「子ども達の放課後の場および子ども食堂」「おとな子ども哲学対話」を開催しています。

「かどのいえ」は築50年の空き家を使用しているため、今回の助成金では居場所として安全に活用できるようにトイレと玄関ドアの交換工事を行いました。自分たちでできることはなるべく自分たちで行い、玄関ドアは中古品を譲っていたことにより費用削減もでき、何より愛着が深まったそうです。

団体名である「心地よく暮らす会Miyasa」の「心地よく暮らす」には4つの要素があります。

「自分の仕事や役割があることで、自分もまわりも幸せな状態であること」「嬉しいときや困ったとき、共有できるつながりがあること」「まわりの子どもたちがのびのびと元気でいること」「誰かの仕事や想いで暮らしが成り立っていることを大事にできること」。これからも小さなチャレンジを続けながら心地よく暮らす0歳〜100歳の人々を増やしていきたいです、と報告をいただきました。



会員の皆さんで「はいチーズ！」

手作り弁当の配布を通じた 寒い冬場のふれあい活動

新潟県佐渡市

みとせ会

助成金額 13万9000円

みとせ会は佐渡市相川地区の高千・外海府に暮らす80歳以上の一人暮らしの高齢者等を対象に外出が困難になる11〜2月に3〜5回程度、手作り弁当を配布し、冬場の生活支援や安否確認を行うために1991年に発足しました。

対象者への弁当配布はみとせ会の会員と地元の民生委員が手分けをしており、民生委員からは弁当の配布があることで、日頃なかなか会にくい人のところへも訪問できる機会となり、状況把握や安否確認ができてありがたいと感謝されていましたが、コロナウイルスの蔓延以降、食を扱う活動自体の予算確保が難しくなり、活動を休止せざるを得ませんでした。

今回の助成金では、コロナ禍によって休止されていた活動再開を進めていくために、弁当容器や調理器具、食材などを購入、また地域への

活動再開のチラシ作成などに使用し、計画通りにこの冬に3回の手作り弁当の配布をすることができたそうです。

みとせ会も高齢化が進み、体調に不安を抱える会員もいる中での佐渡市の厳しい冬場の活動ではありませんでしたが、皆さんからの感謝の言葉を聞いて「体調が良くなった!」と冗談が飛び出すほど会員の皆さんにとってもいきがいになっているとのこと。高齢者は地域とのつながりがある人ばかりとは限らず、特に冬場は雪深く外出も難しくなる地域のため、この手作り弁当の配布が家族以外の住民との貴重な交流となっている人もいるなど、一人暮らしの人には見守りの意味もあります。今後は弁当配布にとどまらない地域住民同士の温かいふれあいの場を提供するような活動を継続していきたいです、と報告をいただきました。

福岡県福岡市

人間もいろいろいいじゃない!
誰もが共存共栄できる社会を目指して

一般社団法人まぜこぜむら

助成金額 15万円

一般社団法人まぜこぜむらは、社会においていつの間に

がつくられてしまったバリアをなくし、障がい者、健常者、高齢者、マイノリティ、子どもたちがまぜこぜで共存共栄できる社会を創ることを目的とし、2021年に発足しました。『月1まぜこぜむら』（憩いの場、毎月第3水曜日）、『まぜこぜカフェ』（憩いの場、毎月第1土曜日）、『まぜこぜ菜園』（畑作り）、『デイサービス訪問』（慰問）をそれぞれ毎月1回程度開催しています。

今回の助成金では『月1まぜこぜむら』『まぜこぜカフェ』にボランティア講師をお招きし、リコーダー教室や薬膳料理講習を開催して参加者に大好評だったそうです。『まぜこぜ菜園』では最初の作物が不作に

終わったために専門家から話を聞き、完全自然農法を目指して整地を行う道具や苗を購入し2度目の種まきに備えているとのこと。また、広報活動としてチラシの作成や活動報告通信、オリジナルキャラクター「まぜこぜおにぎりくん」のキーホルダーを作成し、イベントなどで配布したそ



まぜこぜおにぎりくん



「月1まぜこぜむら」の様子

「地域助け合い基金」 状況のご報告

地域助け合い基金は、能登半島地震の被災地・被災者にも支援を実施してまいります。
引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願い申し上げます。

(6月15日 当財団ホームページ開示時点)

◎寄付受付額

244件 1億9422万2836円

このうち当財団より1億6162万1000円を供出

◎助成実行額

1137件 1億7555万9464円

うです。「まぜこぜおにぎりくん」にはおにぎりの具材はいろいろあって、どれもおいしい。「人間もいろいろいいじゃない？ みんな素晴らしいんだよ！」という素敵な思いが込められています。

今後は常設の「おにぎりユニバーサルカフェ」をつくり、「まぜこぜ菜園」で収穫した野菜を使った軽食を提供する誰もがいつでも安心して集える居場所を提供したいと考え

ています。さらに、野菜を加工して保存の効く商品を開発し、ネット販売・委託販売についても検討しているのとこと。憩いの場で語り合い、たくさんの人に関わってもらうことでコミュニケーションの基礎である「相手を知ること」ができ、お互いに認め合い、尊重し合い、バリアはなくしていけると考えています、と意欲的な報告をいただきました。

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問合せ

地域助け合い基金
担当

電話：(03) 5470-7751

FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

―認知症との
新しい向き合い方

社会医療法人財団石心会理事長
川崎幸クリニック院長

杉山 孝博



(すぎやま たかひろ)
1973年東京大学医学部卒。1998年9月川崎幸クリニック院長に、2023年7月社会医療法人財団石心会理事長に就任。1981年から公益社団法人認知症の人と家族の会の活動に参加。全国本部の副代表理事(副代表)。公益社団法人日本認知症グループホーム協会顧問、公益財団法人さわやか福祉財団評議員。著書は、杉山孝博著「マンガでわかる 認知症の9大法則と1原則」(法研)、杉山孝博監修「認知症の人の不可解な行動がわかる本」(講談社)など多数。

「認知症」および 「認知症の人」について思うこと ―その1―

「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」では、「国民の責務」として「認知症に関する正しい知識及び認知症の人に関する正しい理解を深めるとともに、共生社会の実現に寄与すること」とされています。しかし、認知症を正しく理解することは容易ではありません。本欄では、3回にわたって、「認知症」および「認知症の人」の理解を深めていきたいと思っています。

「認知症とは、記憶力・認識力・判断力・推理力な

どの知的機能が低下して、社会生活や日常生活になんらかの支障をきたす状態である」と定義できますが、「支障をきたす状態」には、認知症の人の能力だけでなく、社会・環境的な要因が少なからずかわっています。例えば、買い物でお金の支払いに手間取ったり万引き(「未払い行動」と呼ぶ人もいます)した場合でも、認知症の人に対応するレジ(スローレジ)や「未払い行動」を認知症の症状と受け止める啓蒙が徹底していれば「支障をきたさなくなる



る」かもしれませんが。つまり、認知症に関するバリ
アフリー化を進めることにより、知的機能の低下が
あっても、その人らしい生活を送ることができる
です。

認知症の人は様々な能力を持ち、喜怒哀楽の感情
を持ち、周囲の人との交流を求めている人であって、
認知症と診断されたら「全て終わり！」ではありません。

私の患者さんの中には、診断後も、仕事を続けて
いる人、華道や組み紐の教室を運営している人、絵
や音楽、舞踊などの趣味活動を継続している人、家
事をそつなくこなしている人など、社会生活や家庭
生活がある程度まで自立して送っている人が少な
くありません。昨年度から「認知症の人と家族の会」
の本人理事になった丹野智文さんのように全国で講
演や発言を続けている人もいます。私の患者さんの
約3割は一人で通院しています。

「認知症と診断されたら何もかもできなくなり、異
常な言動をして周囲の者を困らせ、介護が必要な状
態になる」という誤解と偏見を正さなければなりま

せん。

考えれば、どのような疾患・状態であっても、診
断された瞬間にすべての症状が出るわけではありません。糖尿病を例に挙げると、初期であれば自覚症
状もなく食事や運動に心がけるだけでよい人もいれ
ば、血糖降下剤やインスリン注射が必要になり、さ
らに様々な合併症が加わって生活に大きな制限を受
ける状態になっている人もいます。遺伝的体質、生
活習慣、治療内容などによって病気の進行の速さや
程度が変わってきます。認知症も同じことです。

しかし、糖尿病でも高血圧症でも神経難病でも、
もちろん認知症でも、診断された瞬間、「なぜ自分
がこんな病気になったのか、これまでの生活が破壊
されてしまう、これからどうなるのだろう」という、
不安・恐怖・怒り・絶望などの感情のうねりに巻き
込まれない人はいないでしょう。患者さんの性格や
病気の程度にもよりますが、深刻な状態から抜け出
る最も確実な方法は、患者自身の病気に対する理解
と受け止め、および周囲の人々（特に家族）の理解
と支援にあると思います。

（次号に続く）

人生 | ジェンダーの
視点から
100年時代を
生き抜く知恵 23

世帯単位から個人単位へ

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子



(そでい たかこ)

お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニケーションネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会元副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族 変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路 男の末路』（中央法規出版）、など多数。

日本では、税や社会保障制度、そして行政サービスの多くが世帯単位である。高度経済成長期の頃には、夫婦と子ども2人の核家族が標準世帯とみなされ、こうした世帯を前提に制度が組み立てられていた。働く人の多くは企業に雇われて働くサラリーマン。「夫は稼ぎ、妻は家庭を守る」という分業体制が成立し、世帯主は当然、男性だった。

私の友人は、結婚した当時、夫は無職で、公務員の妻が生計を支えていたので、自分を世帯主に

して役所に届けようとした。ところが窓口の担当者、世帯主は男性に決まっていると言って、なかなか受け付けてくれない。大喧嘩の末、それでも最後には受け入れてくれた。書いたり消したりしたので、申請用紙がぐちゃぐちゃになってしまったと笑っていた。

男性が世帯主の片働き世帯を前提にして、所得税における配偶者控除や企業の配偶者手当があり、サラリーマンの無業の妻が年金保険料を支払うことなしに老齢基礎年金を受け取る第3号被保険

者制度がある。

第3号被保険者制度については、成立した当初（1985年）から、この制度は妻を夫の傘の下に置くため、生涯にわたって妻を隷属的地位に押しとどめるとして、女性の国会議員や女性団体が猛反対した。

しかしマスメディアの多くは、「専業主婦の年金権が確立した」と賞賛していた。たしかに国民年金に任意加入していない専業主婦が離婚をする、と、老後は無年金になってしまう。女性の中には、結婚を機に年金制度から脱退して一時金を受け取る人もいたので、彼女たちにとって第3号被保険者制度は大きな救済であった。

一定水準を超える収入があれば、夫の被扶養配偶者の地位を失い、年金・医療・介護などの社会保険料を自己負担しなければならない。手取り収入が減ってしまうのを防ぐために、パートで働く女性の中には働く時間を抑制する人が少なくない。収入が一定水準を超えた結果、世帯全体の収入

が減ってしまうのを防ぐために、配偶者特別控除の制度がある。だが「世帯主は夫」の片働き世帯を基準にするかぎり、制度の微調整を繰り返しても妻の就労抑制は止まらないだろう。

共働きが大勢を占める今日、妻を夫の被扶養配偶者の地位に留める必要性はあるのだろうか。この際、思い切って、税や社会保障制度を世帯単位から個人単位に切り替え、収入に応じて一人ひとりが応分の負担をする制度に変更してはどうだろうか。

幸いマイナンバーは個人に与えられ、医療保険や銀行口座はマイナンバーカードに紐づけられる。個人単位になれば、DV夫から逃れている妻が医療保険を使えないという不便さもなくなる。国や自治体の給付金は個人の口座に入るので、世帯主である夫に独占される恐れもない。

さまざまな批判のあるマイナンバー制度だが、世帯単位から個人単位への移行をうながす絶好のチャンスとなるかもしれない。

人生100年 地域とつながる施設とは

3

特養ホームにおける虐待の実態

公益財団法人Uビジョン研究所理事長 本間 郁子

特別養護老人ホーム（以下、特養ホーム）は、高齢者の人生最期のステージを支援するという存在意義があります。専門性の高い職員や家族、地域の人たちとの温かな関わりの中で、穏やかに人生を生き切る場です。

この特養ホームで、今、最も重要な問題は虐待が増加していることです。人権を侵害する虐待は市民として決して看過することはできません。

Uビジョン研究所では、2022年9月～202



（ほんま いくこ）

図書館情報大学卒業（現筑波大学）。さわやか福祉財団評議員、学校法人光塩学園評議員。利用者の人権を守るための高齢者生活施設の認証・評価事業を創設。全国の介護施設や市民向けセミナー講師を務める。ハ表彰、2005年国際ソロプチミスト東京受賞、2010年エイボン女性大賞受賞。ハ著書V多数。近著『この一冊でわかる特別養護老人ホームを選ぶチェックポイント』（30ページ）。お申し込みは、AmazonかUビジョン研究所（電話03・6904・4611）へ。

3年12月（1年4か月）にメディアで報道された虐待事案を一覧にし、発生要因を分析、対策についてまとめ、2024年3月に発行しました（Uビジョン研究所のホームページで見ることができます）。

虐待内容の一部を挙げてみると、「93歳の女性が車いすを使用している際に胸や腕を殴り、骨折などのケガをさせた」「90歳の男性が食堂で補聴器の電池交換をしてもらおうと待っていたところ、車いすごと背中を蹴られた。その後、救急搬送されたが病

院で死亡した」や「介助をお願いするが無視」「傷のガーゼ交換を1週間以上怠り、悪臭がしたため患部を確認すると褥^{じよく}そうになっていた」「紙おむつや尿漏れパッドが不足したため、入居者55名に必要なおむつ交換をせず、衣類がぬれるほど失禁させていた。他の人には、紙おむつの一部を切り取ってパッド代わりに使用していた」「認知症の人に対してはよ寝らんか^ゝうるさか^ゝ黙っとけ^ゝ座っとけ^ゝ」「トイレに行きたいと言うと^ゝ自分で行けるじゃろ^ゝ金出せ。高いぜ^ゝ」などと暴言。「60^ゝ90歳の入居者8人の全裸や下着姿を職員が毎日撮影していた」「エアコンが故障したため、入居者の男女7人を数週間、ロビーで寝起きさせ、おむつ交換を間仕切りもせずに行った」「152名の入居者から生活費として預かった現金を無断で他の入居者の病院代などに一時流用していた」などです。

虐待が発生する要因の一つは「人手不足」です。認知症の人や身体的にも常時介護が必要な人が増えている中で、日中は1人で入居者10人、夜間は1人で20^ゝ25人の入居者を看っており、職員の1人が休憩

を取ると40^ゝ50人を看なければなりません。そのような状況で、複数の利用者から同時に介助を求められたり、大声で何度も「おい、おい」と呼ばれたり、一人で歩き出すと転倒する危険性の高い人が立ち上がるとうる場合があります。

そんな時に職員は、最初はやさしい言葉で「待っていてください」と言いますが、それでも聞いてもらえないと、次は威圧的な言葉で「待っているって言っただろ」「聞いているのかよっ」と抑えつけようとします。虐待をした多くの職員は「イライラしてやった」「カッとなった」などと話しています。

誰もがこのような虐待を受けることがないよう、また、虐待をすることがないよう、市民もこの問題に向かい合っていくことが大事です。そのために、自分の将来を見据えて、積極的に自分のスキマ時間をボランティアしたり、施設の設備を趣味の会や話し合いのための場として利用してほしいと思います。そうすることで、少しでも外部の目があり、手助けしてくれると、人は感謝の気持ちで心が穏やかになっていきます。

助け合いの地域づくりに、 当財団のツールをぜひご活用ください

当財団HPトップページ「ライブラリー」→「各種広報ツール」から無料でダウンロードもできます。「新・助け合い体験ゲーム」は1,100円（税込・送料別）となります。

みんなでやってみよう！ 訪問助け合い活動

お互い様の気持ちを一歩進めて、自身の生活も、困っている誰かの生活も豊かにする「訪問助け合い活動」。主に高齢者の家の中で行う助け合い活動について詳しく解説しています。講師用解説書もあります。



いつでも誰でも行ける場所を 広げよう！

居場所ガイドブック

地域の絆を深め、助け合う関係を広げるための共生型常設型居場所をつくりましょう。居場所のつくり方、事例、活動への支援のあり方など、実践ノウハウが分かるガイドブックです。



新・助け合い体験ゲーム

地域の助け合い活動における、ニーズと担い手発掘を体験できるゲームです。助け合いをつくる関係者の研修や住民勉強会等で、効果的に活用していただけます。



【お問い合わせ・お申し込み】

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

● さわやか活動日記(抄)



さわやかパートナー法人（8件）

（50音順）

社会福祉法人五泉市社会福祉協議会

NPO法人

さわやか福祉の会流山ユー・アイネット

公益財団法人住友生命健康財団

一般社団法人全国農業協同組合中央会

有限会社ナースケア

日本郵政グループ労働組合

ハート公所つきみ野

株式会社プロテリアル

一般ご寄付（1件）

奥輝之（1千円）



「地域助け合い基金」で 地域共生社会をつくりましょう

皆様からの
ご寄付を
お待ちしております

「地域助け合い基金」は、地域共生社会実現のため、地域における住民主体の助け合い活動を支援する基金です。日本国内の活動が対象で、高齢者、子ども、障がい者、生活困窮者、外国人ほか、分野は問いません。また、支援したい市町村（区は東京都の特別区）をご指定いただくこともできます。

自由で楽しく、しっかりとした活動を広げるため、皆様のご寄付をどうぞよろしくお願い申し上げます。

＜ご寄付の方法＞

- （1）銀行振込・郵便振替によるご寄付
- （2）クレジットカードによるご寄付

いずれも詳しくは当財団ホームページ
または下記まで
お気軽にお問い合わせください。

＜税制上の優遇措置＞

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

＜お問合せ＞

地域助け合い基金担当

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

さわやか活動日記(抄)

各地・各事業の取り組みをご紹介します



ふれあい推進事業

協議体再編に向けて

第2回ワークショップ開催

■蓮田市(埼玉県)

「5月13日」蓮田市で「高

齢者になっても暮らしやすい地域を考える」ワークショップの第2回が開催され、当財団も引き続き講師を務めた。参加者は79名。本誌6月号で報告の通り、協議体の学び直しと助け合いに関心を持つ新たなメンバーを増やすために、同市では



このワークショップを企画。ボランティア養成講座、介護予防サポーター養成講座修了者への案内や、広報誌でも周知し、今回も幅広い層の参加があった。

前回は目指す地域像と地域課題がテーマだったが、今回は、地域課題解決のために自分たちができること

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SC生活支援コーディネーター

を考え、具体的な内容を話し合うことで協議体のイメージを体感してもらった。

地域ごとに分かれ全18グループで話し合い、発表では各中学校区を代表して5グループが発表し、次のようなアイデアが出た。

平野中学校区は、ごみ出しの課題に対し、ごみ出しができない人の把握とごみ出しに協力してもよいという人を把握するためのアンケートから始める案が出された。また、利用者には安否の目印を掲げてもらうことで、ゆるやかな見守りに

つなげていきたいという。

黒浜西中学校区は、自治会の脱会者が増え地域住民同士の交流の機会がないという課題に対し、高齢者の交流の場を月1回から始め、様子を見ながら開催回数や時間を検討していくなどし、まずはやってみることから始めたいという案が出された。

黒浜中学校区は、地域間の交流がないという課題に対し、自治会館で月2回程度の茶話会を実施する案が出された。体を動かす、食事会、おしゃべり会などを

交え、自治会に入っている・いないに関係なく参加できる仕組みとしたい。また、参加者が固定されてしまう傾向があり、こちらから気になる人を訪問する活動もあわせて行っていきたいという。

蓮田中学校区は、声かけ活動を行い、顔の見える関係づくりから始めていく案が出された。その後、ごみ出し、買い物代行などの生活支援にもつなげていきたい考え。

蓮田南中学校区は、これまで単発で実施したボッチャや講演会等をお寺を開催場所として定期的継続的に実施していく案が出された。また、定期・継続開催により、その場を相談窓口

として、簡単な困りごとの生活支援にも取り組んでいきたいとのこと。

財団からは発表へのコメントを行うとともに、こうした活動を具体化していくためにぜひ話し合いを続けてほしいと話し、協議体への参加を呼びかけた。第1層SCからも、協議体に参加したいと考えている人は

SC実践研修に全市町村が参加 県全体で助け合いを推進

■和歌山県

〔5月20日〕和歌山県SC実践研修に講師として協力した。和歌山県の地域支援事業担当である長寿社会課の遠藤傑課長と鶴田圭吾氏が、当財団の「いきがい・

アンケートで参加意思を示してほしい旨を伝え、あらためて協議体への参加を呼びかけた。

今後は協議体への参加希望者を中心に第2層協議体を再編し、新たなスタートを切る予定。今後の蓮田市の第2層協議体の動きに注目したい。（岡野 貴代）

フェスタの高崎市事例を中心とする研修の講師依頼をいただいたもの。

同県は、鶴田氏が担当になった2021年度から「高齢者の助け合いの仕組みづくりによる生きがいづくり」事業として、自治会などの「顔の見える」関係の中で、日常生活の困りごと（ニーズ）とその担い手となる高齢者を把握し、マッチングを行い助け合う仕組みづくりを進めることを目的として事業を推進している。その取り組みとして、21年度から年3回、講演会とグループワークを実施。加えて、生活支援専門アドバイザーによる伴走支援を実施している。専門アドバイザーは、和歌山県のさわ



和歌山県のSC実践研修の様子

やかインストラクター市野弘氏・紙谷伸子氏・高林稔氏、NPO法人全国コミュニティライフサポートセン

ター（CLC）、NPO法人全国移動サービスネットワーク。支援内容は、規範的統合、協議体立ち上げ・運営、資源把握、支え合いの仕組みづくり等である。

県内30市町村での派遣回数は、21年度25市町54回、22年度27市町61回、23年度26市町村60回となった。

今回のSC実践研修にも全市町村が参加。SCだけでなく、行政職員や社協職員等の関係者を含め129名の参加があった。研修の流れは、まず財団より、「SC・協議体の機能と役割」「資源開発へのプロセス」「住人同士でできる移送支援」について話した。結果だけでなく、プロセスを共有することに重点を置

き、住民主体の生活支援一体系の移動支援の事例も動画を含め情報提供した。熱心にメモを取る参加者も多く、グループワークでは積極的に話し合う姿に感動した。1つでも情報を持ち帰り、できることをやってみようと思えるきっかけになればと、事業の基礎とオンラインフェスタの高崎市の資料を使い、ポイントを押さえながら話を進めた。

鶴田氏は全市町村に訪問ヒアリングを実施。各市町村で助け合いが広まるように、市町村の状況に合わせた内容の研修を行い、各地で始まっている活動の立ち上げまでのプロセスや、県からの情報等を盛り込んだ「きいちゃんのいきいき支

え合い通信」を発行し、県のホームページでも閲覧できるようにしている。

今年度は、遠藤課長も県内全市町村を訪問し、地域支援事業の取り組みについてヒアリングを実施した。市町村の課題をいち早くキヤッチし、実践に結び付けられるような研修とアドバイザー派遣を活用し、きめ細かい伴走支援を行っていく。

研修終了後、参加者から「今回の資料を基にSC同士で復習を行いたい」という前向きな声が聞かれた。今後もさわかインストラクターと連携しながら、必要な支援を行っていく。

（目崎 智恵子）

第2回ワークショップ実施 第2層協議体発足へ

■江東区（東京都）

【5月28日】江東区で、第2回「支え合い大島東ワークシヨップ」が開催された。参加者10名。4月の第1回ワークシヨップ（本誌6月号掲載）では、目指す地域像と地域課題がテーマだったが、今回は、地域課題解決のために自分たちができることを考え、具体的な内容が話し合われた。

SCから第1回の振り返りを行った後、当財団より前回講義の振り返りを行い、なぜ助け合いが大切なのかをあらためて確認し、近い地域ごとに分かれてグループワークを実施した。全体

発表では、住民ができる地域に必要な活動として、次のようなアイデアが発表された。

1グループでは、困っている人の意見を聞こうと目安箱設置の案が出された。できるところから始めていこうと、マンションなど集合住宅の管理人室での設置等から始め、生活の困りごとと同時に協力できる支援内容も寄せてもらい、困りごとと担い手の両方を掘り起こしていく。

2グループからは、まず、すでに行っている「いきいき体操」の集いの場での工

夫が紹介された。新しい参加者が来ると紹介タイムを設けたり、参加のお礼のレターをポストに入れるなど、新しい人が参加しやすい工夫を行っているという。そうしたつながりから実際に生活支援を行った例もあるとのこと。今後は、困りごとの声を上げやすい環境をつくろうと、助けてもらった人の喜びの声を紹介して、遠慮なく「助けて」と言えるようにしよう、というアイデアが出された。

3グループでは、いつでもつながりがつくれるよう、毎日午前中に行う小規模公園でのラジオ体操を集いの場とする案が出された。子どもから高齢者まで誰でも参加でき、犬などを連れて

の参加もOKとして、ペットを介したつながりづくりなど、体操に興味がなくても参加しやすい方法も検討した。

今回のワークショップを行った大島東地域は、江東区の中でも高齢者が多い地域だが、自分たちができる助け合いがさまざまあることに気づきを得たようだ。

最後に、目指す地域像に向けて自分たちでできる助け合い活動を具体化していきたいという思いを持った人は、今後は協議体に参加して話し合いを続けてほしいと話し、まとめとした。

今後は、協議体への参加希望者のほかに、地域のキーパーソンにも声をかけ、6月中に第2層協議体を発

足する予定。都心部で、勉強会から新たに発足する第

2層協議体。今後の動きに注目したい。(岡野 貴代)

社会参加推進事業

高齢社会NGO連携協議会 2024年度第1回役員会開催

【5月21日】2024年度

第1回高齢社会NGO連携

協議会(高連協)役員会が、

大内尉義氏と清水肇子当財

団理事長の両共同代表出席

の下、理事9名、監事2名、

計13名(うち、委任状1名)

参加で、オンライン併用で

開催された。5月30日に開

催される第1回総会に向け

て、議題は、(1)2023年

度事業報告及び決算に関す

る件、(2)役員改選に関する

件、(3)会則改定に関する件、

(4)2024年度第1回総会

議長並びに議事録署名人選定に関する件。

(1)事業報告は、事務局より資料に基づき説明。決算

は監事から監査報告を受けて承認された。(2)は、事務局より全会員からの自薦、

他薦、重任推薦状況を報告

し、現理事2名の退任と新任理事2名の推薦を総会に諮ることとした。(3)につい

ては、清水共同代表より会

則改定の趣旨が説明され、

役員集約して、総

会の議案とすることとした。

(4)は、24年度第1回総会議長として黒水恒男理事、議事録署名人として岡本憲之理事、森義博理事を総会で提案することとした。

また、24年度政策提言事業でもある6月13(15日開

催の第66回日本老年医学会

学術集会の申し込み状況と

集客の確認、7月開催予定

高齢社会NGO連携協議会 2024年度第1回総会開催

【5月30日】2024年度

第1回高連協総会が、大内

尉義氏、清水肇子両共同代

表出席の下、オンライン併

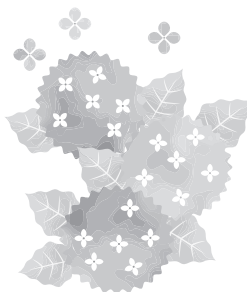
用で開催された。会員21団

体中参加10団体、委任状11

団体に総会は成立した。開

催にあたり、日本高齢者生

の次期役員会の主な議題についての確認を行い、終了した。(玉置 英明)



活協同組合連合会の会長理事(当時)・高見優様より祝辞をいただき、黒水恒男議長が紹介した。

主な議題は、(1)2023年度事業報告及び決算に関する件、(2)役員改選に関する件、(3)会則改定に関する

件。決議議案は全て満場一致で了承された。

(2)役員改選に関する件では、両共同代表を含む理事7名と監事2名の重任、現理事の新井俊久氏と坂林哲雄氏の退任、石田路子氏（NPO法人高齢社会をよくする女性の会）と本間紀子氏（日本高齢者生活協同組合連合会）の新任理事就任が承認された。

報告・連絡事項では、第66回日本老年医学会学術集会に関して、引き続き当日

参加およびオンデマンド視聴希望者の集客と対応について確認した。また、高齢社会をよくする女性の会から高連協会員に、「介護保険サービス利用者実態調査」への協力依頼があり、協力することを確認した。

新役員体制での事業計画を推進するとともに、当財団の社会参加推進事業との連携にも取り組んでいく。

（玉置 英明）

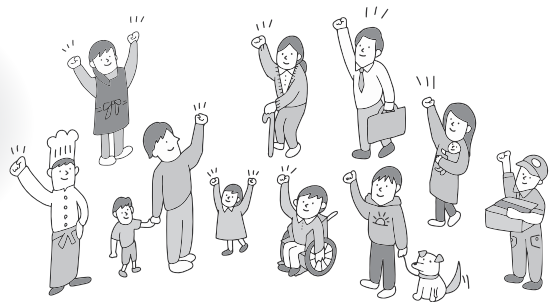


事務所 だより

●学校現場から今年度の研修生としてやってきたKさんは、昼食代を学校の給食と同じ金額までと決めている。聞けば、1年間財団で研修する間も生徒たちと同じ気持ちでお昼を食えるようにしたいそう。同じ気持ちで人と関わること、大事ですね。

さわやか福祉財団は 皆様のご支援によって活動しています

さわやかパートナー
（賛助会員）として、
ご支援をどうぞよろしく
お願い申し上げます。



個人会員、企業・団体等の法人会員ともに、どなたでもお申し込みいただけます。

税制優遇措置もあります。詳しくは、40ページをご参照ください。

◎1回ごとに金額を自由にお決めいただく一般ご寄付も、随時受け付けております。

ご寄付全般に関する
お問い合わせ

電話 (03) 5470-7751

メール mail@sawayakazaidan.or.jp

みんなの広場



その人の生きた時代
知ることも大切では

大浦 むつみさん

長崎県佐々町

「最近、下着の着方もわからないようになった」

若年性認知症の彼女がそう言った。
「どういうこと？」と聞く。

デイサービスで入浴後、下着を自分で着た。半袖シャツを着てその上に長袖シャツ。それを見て介護員さんが言った。

「逆、逆！ 長袖シャツを着てその上に半袖シャツ!!」

「えー????」

私も彼女も昭和生まれ。半袖の上に長袖を着るのが常識だった。確かに親にはそう習った。今はずいぶん慣れたが、長袖の上に半袖シャツを着たり、スポンをはいた上にスカー

トをはく令和ファッションには私も目を疑った。常識が常識でなくなった瞬間!! 認知症の彼女にどうしろというのだ。どっちを上に着ようが いいじゃない。本人の着心地さえ良ければ。あえて長年の習慣を変える必要がある?

間違ひなく彼女はこの介護員さんの一言で自信をなくしてしまった。

その人らしく生きるための介護って何だろう? 「認知症」とひとくくりになっているのは、介護する側だ。

きっと大浦さんが、「大丈夫だよ、おかしくないよ、私も同じ」と言っ
て安心されたことと思います。介護
側は時間に追われ精神的負担がたまり
やすいですが、認知症はもとより、
互いの生き方を尊重するという基本
理解を皆で広げていくことがもっと
もっと必要ですね。





『さあ、言おう』投稿募集

あなたの意見を社会へ生かそう

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる
問題提起型情報誌です。

ぜひ皆様の声をお寄せください

『さあ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、NPOの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について など

投稿の方法

- 字数や回数制限はありませんが、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合があります。あらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。
ただし、掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前のほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添えください。大変参考になります。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX (03) 5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp



『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金(硬貨)でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵は はり絵・池田げんえい



「夏の思い出」

編集後記 ●コロナ禍を乗り越え、各地の活動がまた活発に動き出しているのはうれしい限りです。「活動の現場から」では開設して10年が経った「ささえあいの家」を拠点とした八木山地区社協の皆さんの活動をご紹介します。課題に直面しながら一つ一つ進め、助け合いを広げている様子ををご覧ください(P4~)。●「子どもと一緒に地域で輝こう」は我孫子市の「手賀沼まんだら」の皆さんの活動をご紹介します。皆さんの地域に子どもと大人が交わる居場所や活動はどのようなものがありますか? いろいろな工夫が参考となるはずですよ(P11~)。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

石山
麗子



●国際医療福祉大学大学院教授

最近、介護予防がてら水泳を始めました。
ケアマネジメントを通じて、介護になっ
てもその人が大切にしている関係をずっと紡
いでいけるよう活動しています。

まちのなか、いつも通る道やお店で何度も見かける人、
しばらく見ないと少し気になる。

そう思うのは、私だけ？

友人も「あるよね！」と。

無意識的にも気にかける、かけられる、

細い糸も社会の繋がりと感じた。

さあ、7月号

通巻371号 2024年7月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
取材協力 七七舎
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

能登半島地震被災地へ

地域助け合い基金からの 支援のご報告

能登半島地震復興支援の呼びかけに際し、当財団の「地域助け合い基金」にご寄付をお寄せいただきまして心より感謝申し上げます。

石川県及び同輪島市を指定してこれまでにご寄付いただきました金額を、支援金として以下のとおりお送りさせていただきました。

【送付先】 一般社団法人
みんなの健康サロン海風
(石川県輪島市)
代表理事 **中村 悦子さん**

みなぎ

【支援額】 633,000円

中村さんは、当財団のさわかインストラクターとしても活躍いただいている方です。地元輪島市で訪問看護師として活動している中で、ご本人も被災しながら、元日の震災直後から地域の高齢者をはじめ被災者の皆さんの支援に尽力され、その姿は全国の報道でも取り上げられています。今後のコミュニティ再生に向けて中村さんが現地で仲間の皆さんと行っている支援活動を応援させていただきます。活動の状況はまた本誌でご紹介いたします。